

モンゴルにおける障害児者の状況に関する現地調査報告（その2） ～ウランバートル市と地方都市におけるインクルーシブ教育と障害者の医療・福祉～

Education, medical and social welfare for disabled persons in Mongolia (2 nd.)

石倉 健二*
ISHIKURA Kenji

本学特別支援教育 GP における国際協力プログラムの一環で、モンゴル教育大学との研究交流を行った際、現地のインクルーシブ教育と障害者の医療・福祉の状況についても調査を行った。2012年の新政権発足以降、障害児者や子どもについての政策が展開し始めている。それを受けるように、インクルーシブ教育のための学校整備とともに、モンゴル教育大学に特別支援教育学科が設置される運びとなるなど、専門家の養成も進み始めている。現場では、予算や専門家が足りないという状況に変わりはないものの、今後の展開が期待できる状況となっている。

キーワード：モンゴル、ウランバートル、障害児者、インクルーシブ教育、医療・福祉

Key words : Mongolia, Ulaanbaatar, disabled persons, inclusive education, medical and welfare

I はじめに

兵庫教育大学特別支援教育 GP の国際協力プログラムにおいて、モンゴル教育大学との研究交流を4年間にわたって行った。モンゴル教育大学は、モンゴル国内の教員養成大学の中心的役割を担っている。今回の研究交流では、インクルーシブ教育のために、学校教員に障害児のことを理解するためのカリキュラムの検討とテキストの作成、各種講義と現地調査を行った。

石倉(2012)は、ウランバートル市(以下“UB”と表記)と地方都市におけるインクルーシブ教育及び障害児者の医療や福祉の現状について報告を行ったが、本報告はそれを補足するとともに、新たに得た情報について追加を行うものである。年数の経過、地域差や学校差、通訳を介することによる翻訳のズレなどによって詳細な部分で必ずしも正確ではない部分もあり得るが、概要を把握するための資料としたい。

1. モンゴル国の政治状況

2012年6月に、民主化以降6回目となる総選挙が実施された。この選挙では大幅な選挙制度改革が実施され、民主党が第1党となり、公正連合及び国民勇気・緑の党との連立政権を樹立し、民主党党首アルタンホヤグ氏が首相となった。モンゴル政府2012～2016年の施政方針では多くのことが示されているが、障害児者に関連する内容としては大きく以下の二点が挙げられていた。すなわち、社会保障分野においては“各県、各区に障害のある子どもの教育、医療サービス支援センターを建設し、障害児自身の参加を支援する”ことが示され、教育分野においても“障害を持つ子ども向けの教科書、備品を提供

し、大学で学ぶ機会を向上させる”ことが示されている。この新政権発足にあわせて省庁再編も行われ、Population and Developmental Ministryが新設され、その省で、子ども、女性、障害者に関することを一括して対応することになったという情報を得た。また、教育省にはインクルーシブ教育の部局が新設されたということも聞いている。なお、モンゴルダウン症協会会長S. オユン氏は国民勇気・緑の党の党首で、新内閣では自然環境・グリーン開発大臣でもある。これらの幾つかの情報は、このオユン氏からのものである。

2. モンゴル国と日本との関係

外務省資料(2012)によれば、1990年にモンゴルが民主化・市場経済化への移行を始めてから現在に至るまで、日本は一貫してモンゴルの最大援助供与国であり、モンゴル国民もきわめて良好な対日感情を有すると紹介されている。日・モンゴル間では、2010年に“戦略的パートナーシップ”の構築が共通の外交目標として掲げられ、2013年3月に安倍総理大臣がモンゴルを訪問した際には、これを深化させるために、政治・安全保障、経済、人的交流・文化交流の3つの分野の協力を強化していくことで一致した(外務省資料)。

II インクルーシブ教育の概要と現状

本報告では「インクルーシブ教育」と表記するが、モンゴルにおけるこの用語の用いられ方は、軽度障害の子が普通学校で授業を受けることも含み、中重度障害でこれまで教育の対象ではなかった子ども達に教育を受けさせようとすることも含んでいるようである。すなわち、

*兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース

何らかの障害のある者（児を含む）に関する教育の全てを「インクルーシブ教育」と呼んでいる状況にあると思われる。

1. UBのインクルーシブ教育の現状

(1) 就学手続き

特別学校の校長などから入手した情報であるが、モンゴルでの学校の入学は基本的に保護者が学校に入学を申請して、それが認められると入学となる。特に特別学校では、保護者の申請を受けて、教師が子どもの様子を見て、それで入学が決めることになる。定員がいっぱいであれば、入学はそこで断られて、来年のチャンスを待つ、と言うことになる。どこの学校に入学させたいと希望するか、どこに学校があるかを調べること、入学の申請などはすべて保護者が行うものである。そのため、地方からUBに出てきたためにそうした就学の仕組みを知らなかったり、どこに学校があるか分からなかったり、貧困状態であったり、子どもに障害があったりすると入学が遅れることになる。また、普通学校に通っていたが学習についていけないために、特別学校に入学させてほしいと保護者が申し出る場合もある。

特別学校の卒業については、特定の課程を修了して卒業するというよりも、18歳頃までは学校に通って、親が来てそろそろ働かせたいので学校をやめさせたいと申し出てくることで卒業となることが多いということであった。中には、もっと長い期間を学校に通わせてほしいと望まれる場合もあるが、最高でも22歳頃までには卒業することになる。このような形式での卒業の場合には、卒業証書は発行されず、教育記録に関する手帳（国民全員が持っているらしい）に教育の記録が残されることになる。

教育に関する行政的な指導は全て国の教育省からのもので、それに従っている。UBの場合には、区役所に教育担当者がいて（バヤンズルフ区では4人）、その担当者が区内の全ての学校の全てのことを担当することになる。区の教育担当者の具体的な役割としては、教育省からの情報や区のイベントやセミナーの情報を学校に伝達したり、学校の情報を市に伝えるための窓口となっている、ということであった。

(2) 第70学校（知的障害）

石倉（2012）は、ここに国内の言語治療センターが設置されていると報告したが、筆者らが訪問した2012年9月時点では、その担当者が退職をしたために言語治療室は閉鎖されていた。

小学校3年生クラス（10人）の授業を参観。筆者らが訪問することにあわせて、あらかじめ念入りに準備したと思われる授業が行われる。授業は「秋」をテーマにし

た文章作り。「秋になる」「秋は野菜できる」「秋はキャベツ、ジャガイモできる」「秋はキャベツ、ジャガイモ、玉ねぎできる」といった文章を作り、それを教師が板書し、生徒はそれをノートに書いて、そして覚える、という手順で進められる。さらに、これらの単語を活用して発音の練習と5までの数を数える練習も行われる。大半の6～7人の児童はこうした授業についていけないが、明らかに知的障害があると思われる小頭症らしい児童は、イスにじっと座っておくことができず、教師がずっと手をつないでいた。2～3人はこうした一斉授業にはついていけない。

運動療法室は体育の教師が担当し、25人の児童生徒を担当し、個別のトレーニングを行っている。児童生徒の障害種は脳性マヒ14人、ダウン症5人、知的障害6人ということであった。担当教師は、この子たちに何を指導してよいのかが分からないととまどいをみせていた。



写真1 第70学校3年生クラスの授業の一コマ

(3) 第55学校（知的障害）

ガンビレグ校長は2012年5月に日本を訪問し、兵庫県内の特別支援学校と障害児者施設、保健センターなどを筆者が案内した。その時の資料以外にも、世界各国の障害児者に関する教育制度や保健福祉制度についての情報収集を熱心に行っている。日本の個別の指導計画の様式を元にIEPを整えようとするなど、障害児教育に関する体制を整備しようとする熱意を感じる。

筆者らが訪問した9月から新学年が始まっているが、今年の小学校の新入生は41人。内訳は、6歳で入学した児童が1年A組で10人、7歳で入学した児童が1年B組で10人、8歳で入学した児童が1年C組で11人、9歳以上で入学した児童が1年D組で10人。その中の最高齢は17歳ということであった。

運動療法はここでも体育の先生が行っている。UBに歩行器などの器具を売る会社があったので、そこから道具を買えるようになったらしく、幾つかの新しい道具が利用されていた。この授業は子ども1人あたり20分で、1週間に2回行われる。この学校では治療体育を受け持つ教員は1人で、担当する児童生徒は19人。この教員は、JICAから派遣された元養護学校教員の指導を受けてい

た。

言語治療の授業を担当するのは、ロシアで勉強してきた教員4人。担当する児童生徒は56人で、基本的にマンツーマンで実施している。この授業も子ども1人当たり20分で、1週間に1～3回実施されている。担当者は、指導をしたい児童生徒は今の2倍くらいいるけれど、担当者も部屋も足りないと述べていた。授業内容としては、構音障害に対する発音練習が多いような印象を受けた。

見学後に職員室で簡単なミーティングの時間を設けたが、多くの先生方が異口同音に「研修のチャンスがない」「何を指導すればいいのかわからずに困っている」「日本で研修を受けたい」と語っていた。

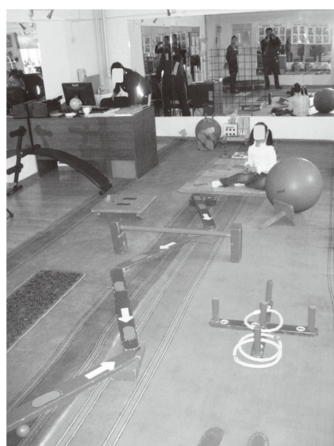


写真2 第55学校運動療法室

(4) 第29学校（聴覚障害）

モンゴル国内唯一の聴覚障害の特別学校。2012年9月現在、1～12年生に340人の生徒が在籍。そのうち180人ほどが、田舎から出て来ているので寮生活を送っている。生徒の年齢は6歳から24歳とばらつきがある。田舎から出てくるような人の場合に、高年齢となる場合が多い。生徒は、聴覚障害の単一の子が多いが、20%くらいは知的障害も合併している。ただし、あまり知的障害が重くて身の回りのことができないような場合には、この学校への入学は断っている。聴覚障害については、全く聞こえないような場合でも受け入れることにしている。今年は33人が入学したが、その中で8人が全く聞こえず、他は難聴である。新生生のうち7歳以上の子が10人。今年の入学者には、なぜかたまたま補聴器を着けている子が多いということであった。

この学校に限らずどの特別学校にも医師が勤務しており、この学校は生徒の人数が多いので特別に小児科と聴覚の2人の医師が勤務している。この聴覚の医師は、この学校に勤務して21年目になる。その医師の話によれば、聴覚障害の原因として、以前は薬（ロシアが使っていた抗生物質）の後遺症が多かったが、今は、先天性の

ものが多いということである。風疹などの妊娠中の感染症の場合もある。

1～2年生は、先生たちが作った特別の本で勉強し、3年生以上は基本的には通常教育の本を使用している。9年生になると、散髪や料理、木工などの職業教育を積極的に行っている。

5年生の授業を見学する。このクラスは11人で、他のクラスも1クラス11人くらい。担任の先生はロシアで勉強して、この学校で勤務して30年になる。授業は、手話、口話、指文字、文字で行われている。手話は、以前はロシア手話であったが、今はモンゴル手話を使用。

続いて職業コースを見学する。理髪コースは、9～12年生併せて13人で、女子が多い。理髪は免許が必要なので、その免許を学校から出すことになる。免許を取得した後は、田舎に帰って自分でお店を開業する場合もある。料理コースは25人の生徒を2人の教員で担当。木工コースは就職率がよく、個人で仕事をできる場合もあり、中には大学に進学する子もいる。絵画コースは、3年生から美術の授業があるので、上手な子が絵画コースに来ることがある。

運動療法の教室は、大学で治療体育の授業を受けた2人の体育教師が担当している。脳性マヒなどを合併している児童生徒が40人ほどおり、授業は1人あたり20分、週に2回の頻度で実施している。



写真3 第29学校の外観（入口）

(5) 通常学校（国立）

第107学校（ソングノハイルハン区）を訪問。ここはゲル集落の中にある学校で、貧困家庭が多い。

2001年の雪害以降、田舎からUBへの人口流入がおきたため、これまでこの周辺の地区には人が住んでいなかったが、ゲルに住む人たちが次第に増えてきた。そのため2007年にこの学校は建て替えられたが、毎年人口が増え続けている。そのため、もともと640人用の建物として作ったのに、今は1500人が在籍している。そのため、この学校の小学校クラスでは特別に3部制で授業をやっている。すなわち、小学校クラス（1～5年生）の1部は朝8時から11時40分、2部は11時40分から14時40分、3部は14時40分から18時30分となっている。中学校・高校

(7~12年生) (現在、新体制に移行中のため「6年生」というクラスは作っていない) は2部制で、1部は8時から13時15分、2部は13時30分から18時30分までとなっている。2008年から、小学校クラスは教科書が無償配布になり、中高は貧困家庭のみ配布となった。1、2年生は一コマ35分で授業間の休憩は5分。3年生以上は40分の授業で、授業間の休憩は5分。小学校は2時間目と3時間目の間に15分の休憩があって、お茶を出している。そのうち週に2日はおかゆとアールツ (モンゴルの乳飲料の一種) を出している。あとの3日はウッディンツァイ (菓子パンみたいなもの) と小さな牛乳 (140g) を出している。貧困家庭が多いということもあり、ウッディンツァイが好きな児童生徒は多い。

この学校では、体育、音楽、労働授業 (木工、縫製) の授業に力を入れていて、木工や縫製の道具は米国 NGO のワールドビジョンが提供している。UB 市内のバレーボール大会で2位、合唱大会も2位になるなど、実績もあげている。ただ IT 環境は未整備で、地域的にインターネット環境も整っていない。そのため、PC やプロジェクターを使うような授業はできない。

貧困家庭の児童生徒が多いので、学校が終わった後の時間に働く子が多い。家のことはもちろん、バスの車掌 (料金集め) をする子もいる。9年生を終わった時点で30%くらいの生徒が専門学校に行き、あとの70%が高校に入学する。

(6) 通常学校 (私立)

UB 市中心部にある私立ゾンビレグ学校の小学2年生クラス (11人) のモンゴル語 (国語) の授業を参観。ダウン症の児童が在籍しており、その様子も併せて観察。ダウン症の児童は文字が多少読めており、担任も授業の合間に声かけを行ってはいらるものの、一斉授業には明らかについていけない。担任はその児童向けの教科書を別に用意し、教材も工夫しているが、クラス全体を指導しながらその児童への個別の対応をすることには無理がある。授業の実施体制に大きな課題がある。

モンゴルでは就学率が向上してきたために、障害のある児童生徒も就学するようになった。そのため、通常学校に通う軽度障害の児童生徒への対応も課題になりつつあるということである。例えば、視覚障害ではないはずなのに見えにくい子どもや、知的障害ではないはずなのにうまく勉強ができない子どもなどである。こうした子ども達についての診断や評価、対応が通常学校の先生たちにとって今後の大きな課題になると関係者は考えている。

(7) 私立学校 (富裕層向け)

障害児向けの特別学校ではなく、富裕層向けに、一般の学校教育とは全く異なる学校も訪問する。

市内中心部に、各国大使館やモンゴル国立大学、デパートなどが並ぶ一角にある私立のオルチロン学校。ここは、MCS というモンゴルの会社が、世界に通用する人材を育てようと10年前に設立。MCS はパソコンの Dell をモンゴル国内で取り扱ったり、不動産業など多様な事業展開をしている。この学校の年間授業料は \$ 5,000~9,000 で、庶民には払いきれない高額である。

生徒数は幼稚園から高校 (11年生) まで900人が在籍し、教員は122名。どの学年も1クラスは26名程度にしている。朝8時に始業で、小学生は2時30分までだが、その後もアフタースクールの活動を17時頃まで行っている。小学生にもアフタースクールの部屋があり、親が迎えに来られない場合でも、そうした部屋で過ごすことができる。アフタースクールのためのアクティビティ (クラブ活動のような印象) が幾つもあり、ピアノ、チェス、テニス、バレエ、バスケット、伝統音楽、絵画、陶芸、英語をはじめとした幾つかのものがある。モンゴルの教育課程とケンブリッジのプログラムを融合させた授業内容にしているということであった。

校舎は壁も床も天井もきれいに整えられて全体にカラフルで、廊下には個人用ロッカーが並ぶ。廊下の掲示板には、成績優秀者やスポーツや国際数学コンクールなどで優秀な成績を収めた児童生徒の写真と名前が掲示してある。校内には、温水プールもある。普通、モンゴルの人は泳ぐことがないので、泳げないことが多い。ここの生徒はだいたい3年生までに泳げるようになるということであった。体育館とは別に、トレーニングジムも整備されている。パソコン室、化学室、生物室、音楽室、などの特別教室も整備されている。

授業は PC やプロジェクターを使ってやっているものも多い。見学したときには、数学の授業を英語で行っていた。モンゴル人教員も英語で授業をしている。英語や中国語の授業は小学校1年生から取り入れており、外国人教師も何名かいる。教員はモンゴル教育大学の卒業生であるが、ロシアや日本など他の国で勉強した人も多い。ここでの授業方法については、学校内で外国人教員から研修を受けている。また、ここの教員は毎年、外国の学校で研修を受けている。ここの学校の教員の給料は高額で、普通の国立学校の教員の約2倍ということである。

卒業生の7割は外国の大学に入学しているということであった。設備、内容ともに日本や欧米にも引けをとらないものであると感じた。当初の目標通り、世界に通用する人材が育成されていると思われる。数年先には、ここの卒業生が外国で学んだ成果をモンゴルに持ち帰ることが予想される。

2. アルハンガイ県の学校教育とインクルーシブ教育の現状

アルハンガイ県はUBのある中央（トゥブ）県の西にあり、UBから車で7～8時間の距離にある。県の面積は約52,500平方キロメートル（中国地方5県と四国地方4県をあわせたくらい）で、人口は約10万人。19の村と99の地区がある。県都ツェツェレグにあるアルハンガイ県教育庁を訪問して、アルハンガイ県の学校教育の概要についてレクチャーを受ける。

県教育庁には16人のスタッフが勤務し、そのうち13人が専門スタッフ。教育庁の主な役割は、学校教員の仕事をチェックしたり、教育省の命令を学校に通達するなどの業務。担当の部門としては、保育園、外国語、モンゴル語、小説や詩、技術、文化（博物館、図書館、文化センターも含む）、数学、化学、生物、社会学、統計・情報、健康・スポーツ、アルバンボス（遊牧民などで教育を受けて来なかった子どものこと）があり、13人がそれぞれの一つの部門を担当している。さらに教育長と副教育長がおり、いずれも学校教員経験者。

2011年のデータでは、2～8歳の学齢期（保育園対象も含む）で学校園に通っている子どもたちは19,900人。県全体で障害のある子どもは1,300人で、そのうちの963名が学校に通っているということであった。アルハンガイ県には特別学校がないため、これらの子どもたちは普通学校に通っている。障害の内訳は、保育園（2歳～5歳）で視覚障害6人、聴覚障害1人、言語障害9人、知的障害3人、肢体不自由12人、合併症3人、の合計34人。6歳以上では、視覚障害355人、聴覚障害178人、言語障害198人、知的障害70人、肢体不自由110人、合併症52人である。ただしこれらの障害については学校の担任の先生が判断しているために、診断名の真偽は定かではない。国からの指示では、教育委員会が専門家チームを構成して評価をすることになっているが、それができそうな専門家がないために、実際には正確な把握はできていない。

遊牧民であるといった理由から学校に来ることのできない子どもたちのために、6～8月の時期に、先生たちが移動式学校（ヌートリン・ゲル・ソルボル）に行って教えるプロジェクトも実施している。そうした取り組みもあわせて、今では5歳8カ月から6歳8カ月の間にみんな学校に入学する状況が整いつつある。

3. インクルーシブ教育のための教員養成について

石倉（2012）は、モンゴル教育大学の担当者はインクルーシブ教育の専門教員養成コースの整備を進めたいと考えていると報告したが、2013年9月に特別支援教育学科がモンゴル教育大学に新設されるという情報を得た。今後、兵庫教育大学との交流が進むことが望まれる。



写真4 ツェツェレグ市内の学校入口と下校風景



写真5 ツェツェレグ市内の学校と校庭

III 障害者の医療と福祉の概要と現状

1. UBの医療と福祉の現状

(1) Family Center

2006年からバヤンゴル地区の障害のある子どもと家族を支援するセンターとして開設された。2012年8月から始まったプログラムでは、学校に行けない子ども達の発達を保証するための家庭での取り組みや、あるいは学校に通えるようにするための方法、などについて15人の子を対象に実施している。対象児は4～19歳で、貧困であったり、登下校の付添いがいないことで、学校に通うことが困難になっている場合が多いようである。また、家族から相談が寄せられるが、子どもに障害があることについての心理的ショック、安定した生活をする方法が分からない、子育てをどうしていいかわからない、子どもとの関係をどうすればいいかわからない、といった相談内容が多いということであった。

センターに通うことよりも、センターからの家庭訪問を中心的な方法としている。予算が少ないために専門スタッフを雇用できず、学生ボランティア（モンゴル教育大学の2年生または3年生）が対応しており、相談についての知識や経験が不足しているという困難点があった。

このセンターの家庭訪問に同行する。UB市中心部近くにあるゲル集落の中で、7～8歳くらいの重度重複障害児を育てている家族であった。よくあるタイプのゲル（遊牧民が使用する直径10メートル弱の円形テント）に、10人ほどの家族が住んでいるということであった。子ど

もの発達状態としては、未定頭で、伸展パターンが強い。発声はあるが、発語はない。簡単な単語理解もできるかどうか判然としない。泣いたり笑ったり単純な感情表出はある。咀嚼はできず、カーシ（小麦粉を練ったものと肉のスープ）や粥状のものを介助下で時間をかけて飲み込んでいる。介助は丁寧だが、介助法についての指導を受けた様子はない。この子を母親と母親の妹が交代で世話をしており、介助者の二人も子ども本人もほとんど家から出ることがないと話していた。母親の妹はこの子の世話のために仕事を辞めたと話していた。車イスをはじめ、肢体不自由児のための道具は何もない。父親の安定的な仕事もなく、大家族で日々をやっと暮らしているといった印象を受ける。こうした家庭に訪問し、親への相談業務だけでなく、介護技術の指導、社会資源の活用、経済的支援、など多面的な支援が必要な実態が多くあることを実感した。

(2) National Rehabilitation Center (国立リハビリテーションセンター)

2011年に旧センターの隣接地に新しい建物ができて規模が拡大し、治療や機能訓練を行う病院部門、義肢装具部門、職業訓練部門、地域交流部門の4部門が設置されている。このセンターは国内唯一の職業リハビリセンターで、「機能発達」「就労支援」「生活と環境の向上」を目的としている。センターとしては今後、「外国機関との交流を増やす」「道具をたくさん作る」「センター教員の専門性の向上（海外研修含む）」を図っていきたいということであった。

このセンターの病院部門は、15床の入院設備と外来部門を持っており、治療や機能訓練、職業訓練を入院で受けることもできる。医師、看護師の他に理学療法士（PT）と作業療法士（OT）も勤務している。PTはモンゴル医学大学で学んでいるが、OTは特別なコースで学んだわけではなく、元々は看護師であったが、JICAのメンバーと働く中でOTのことを学んだということであった。

義肢装具部門では義肢装具を作成しており、JICAのメンバーが技術協力を行っていた。

職業訓練部門は、通所しながら1年間の職業訓練を受けることができる。特別学校の卒業生だけでなく中途障害の成人も対象で、2012年9月の入学者は106人。通えない人向けの寮が入院設備とは別に20人分がある。今年の入学者の障害種は、知的障害が47人、聴覚障害が28人、肢体不自由が17人、視覚障害と精神疾患がそれぞれ7人である。ここに入学すると授業料も寮費も無料で、16～24歳であれば、毎月24,000Tg（約1,500円）の手当てがあるということであった。

(3) ソロンゴセンター

入口の看板には「特徴のある子ども達の発達センター」と表記してある。ヨーロッパのカトリック系の団体が1997年に設立。最大受け入れ人数は30人で、毎日6～23歳の22人が来所している。自立できないくらいに障害の重い子（例えば車イスだと2階に上がれないから）は受け入れをしていない。ここに通っている子どもたちは学校で受け入れてもらえないような子ども達と言うことであった。実際に、モンゴルの特別学校ではあまり見かけなかったような典型的な自閉症や重い知的障害と思われる子どもたちの姿を多く見かけた。この入所については、親が知り合いや友達から情報を得て入所の申し込みに来ることが基本だが、市役所から紹介される場合もある。

小学生程度の年齢と思われるクラスでは、明らかに自閉症と思われる子を含めた7人がおり、「静かに座ったり、集中して何かに取り組む」ことを課題とする授業が行われていた。担当の先生は2人。9時から5時までの時間割があり、学校としての機能と学童保育的な機能を持っていると思われる。隣のクラスは、やや大きい子たちが6人で、身の回りのこと（掃除、タオルや洗濯物をたたむこと、など）や制作活動を行っている。制作したバッグなどの小物は、販売もしている。

このセンターは、外国からの援助や交流を積極的に行っていて、最近では台湾との交流を盛んに行っている。国内では勉強をする機会がないので、外国の支援が貴重なものとなっている。



写真6 ソロンゴセンターの1室

(4) 第10治療保育園

現在は、1～12歳の子ども120人が通う。午前8時から午後5時までをここで過ごすことになる。スタッフは49人。入園は、親が申し込みをすることが多いが、たまに市のSWが紹介をすることもある。それでも、最重度の障害やてんかん発作がある場合には、受け入れを断ることがある。12歳でここは卒園となるが、その後は特別学校や通常学校に行く子もいるが、学校で受け入れてもらえずに結局は自宅で過ごすことになる場合が多く、そうした子どもたちに家庭訪問ができないか検討している

ということであった。

モンゴル医学大学の理学療法コースで学んだ理学療法士が3名おり、主に肢体不自由児の運動機能訓練を行っている様子である。他に言語治療の担当者などもいるが、系統的な専門的教育を受けているのは理学療法士のみであった。施設長はこうした職員達に専門的な研修を受けてもらって、障害に関する基礎的な知識や技術を身につけてほしいと考えている様子であった。



写真7 第10治療保育園の1室

2. 障害児者に関連する専門職の養成

2009年にモンゴル医学大学に群馬大学のバックアップで理学療法コースが設置された。モンゴル医学大学には、医師養成コース、看護師養成コース、薬剤師養成コース、理学療法コースがあるということであった。理学療法士は、モンゴルの国家資格ではないものの、3年半の養成期間となっており、系統的な専門教育がなされていると思われる。今後、このコースを卒業した人たちが、障害児者関連の現場で活躍することを期待したい。さらに、作業療法や言語療法、心理士などの養成システムの整備が課題となると思われる。

IV まとめ

2009年度から毎年モンゴルを訪問し、調査と研究交流を行っている。UBを訪れるたびに、街が整備され、様々な体制も変わっており、急激な発展をしている真っ最中の国であるという印象を強く受ける。平原や砂漠の中の町がどうなのかは分からないが、少なくともUBについては、今後数年のうちに道路や住宅、学校、病院、情報通信網などのインフラがかなり高いレベルで整備されることは疑い得ない状況となっている。またその発展において、隣国である中国やロシアの影響はもとより、韓国の影響力はかなり強い。また大学の研究者の多くはアメリカで学んでおり、今後はアメリカの影響力も強まっていくものと思われる。

こうした状況にあって、日本のインクルーシブ教育あるいは障害児者支援のための知識や技術がどの程度モンゴルで受け入れられるのかは、諸外国との比較競争の中にあると言える。すなわち、モンゴルが今後、障害児者

支援のための制度を整え、教員養成も含めた専門家養成を進めていくに当たり、韓国やアメリカ、ロシア、中国など諸外国と比較されながら取り入れられることになることは容易に想像できる。日本の制度や理念、知識や技術などが本当に役に立つものであるのかどうか、モンゴルとの関係を通して逆照射されているとも言える。今後、モンゴルとの関係を通すことで、私たち自身の専門性がさらに問われることになるを考える。

※本報告は、2009年・2010年・2011年の兵庫教育大学学内GP「特別支援教育における国際協力プログラム」及び2012年の兵庫教育大学学内GPの助成を受けて実施したものの一部である。

謝辞：今回の調査を行うに当たり、全面的に支援していただいたモンゴル教育大学心理学部バトツェンゲル准教授とミヤグマル教授には感謝を申し上げます。また、モンゴル訪問の機会を与えてくださった本学特別支援教育専攻鳥越隆士教授、及び調査に同行いただいた同僚の井澤信三先生、岡村章次先生には感謝を申し上げます。さらに、専門用語も交えた通訳や翻訳にご尽力いただきましたBATKHISHIG様にもお礼を申し上げます。皆様、ありがとうございました。

文献

石倉健二（2012）モンゴルにおける障害児者の状況に関する現地調査報告～ウランバートル市と地方都市におけるインクルーシブ教育と障害者の医療・福祉～．兵庫教育大学研究紀要，40，37-50．

資料

外務省：安倍総理のモンゴル訪問（概要） http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/page11_000001.html（閲覧日2013年4月23日）
 外務省アジア太平洋州中国・モンゴル第一課：最近のモンゴル情勢と日・モンゴル関係 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/pdfs/kankei.pdf>（閲覧日2012年12月27日）
 モンゴル最新ニュース：<http://mongolnews.blog133.fc2.com/category3-1.html>（閲覧日2012年12月27日）